

日本皮膚外科学会

第20回記念特別講演

平成17年8月27日(土)

講演者 岡田 益吉

演題 「細胞の生死、人間の生死」

講演者 波平 恵美子

演題 『日本人の死生観 - 「死者」の存在への確信』

特別講演 . 「細胞の生死、人間の生死」

お か だ ま す き ち

岡田益吉 先生

(国際高等研究所副所長)



生物学は、生きているというのはどのようなことかを知ることにより主力を注いできました。生物学者が「死」を生命現象の一つとして見るようになったのは、1972年に Kerr、Wyllie、Currie の3人の病理学者が「アポトーシス」を発見してからと云ってよいと思います。「死」は、私たち人間を含む多細胞生物が生命伝達的手段として有性生殖を採択した時に獲得したもので、体細胞に例外なく訪れる最も確かな生命現象です。それにも拘わらず、「死」一般についての研究は余り盛んであるとは云えません。

死を生命現象の一つとして扱うのは抵抗があるかも知れません。しかし、生きている細胞と、死んでいる細胞はどこが違うのか説明するのはそれ程簡単ではありません。「死とは何か」をまず細胞レベルで問うことから始める必要があると思います。

多細胞生物の一個体を構成する細胞の数は、線虫 (*C. elegans*) では正確に 959 個、人間ですと約 60 兆個と推定されています。それらの細胞は様々に分化し、個体の生存に必要な役割の一つをそれぞれが分担しております。どの役割も個体の生存にとって必要なものではありませんが、自ずと軽重があります。例えば、哺乳類では心臓の一領域を占める細胞が死に、心臓が機能を失ってしまうと、個体は比較的短時間の間に「死」を迎えます。しかし、例えば四肢の一本を失うほどに大規模な細胞死が起こっても、それが直ちに個体に「死」をもたらすとは限りません。

このように、細胞の死と個体の死とは必ずしも 1 対 1 に対応するものではありませんが、個体の死の原因は必ず細胞の死です。ですから、先ず細胞の死から話を始めさせて頂き、個体の死との関係、特に人間の場合、個体の死とはどのような状態であるかまで話せれば、と思っております。

略歴

昭和7年2月17日生

(財)国際高等研究所副所長

筑波大学名誉教授 理学博士

(学歴・職歴)

東京教育大学理学部生物学科動物学専攻卒業 (昭和29年)

東京教育大学大学院理学研究科博士課程修了 (昭和35年)

カリフォルニア大学招聘研究員、東京教育大学理学部助教授、筑波大学生物科学系助教授、筑波大学生物科学系教授、平成7年筑波大学を停年退職後、同校名誉教授

平成13年4月より現職

(著書)

「昆虫の発生生物学」東京大学出版会 (昭和63年)、「ショウジョウバエの発生遺伝学」

(共編)丸善

(平成元年)

「生殖細胞」(共編)共立出版(平成8年)、「発生遺伝学」〔編著〕裳華房(平成8年)、
「宇宙環境利用のサイエンス」(共編)裳華房(平成12年)など
(訳書)

「死はなぜ進化したか」三田出版会(平成9年)

「遺伝子医療の時代」共立出版(平成11年)

専門は発生生物学。特にショウジョウバエの発生遺伝学(現在の興味は生殖細胞の個体発生と系統発生)

昭和63年日本動物学会賞、平成6年日本遺伝学会木原賞。

特別講演 . 『日本人の死生観 - 「死者」の存在への確信』

なみひら えみこ

波平恵美子 先生

(お茶の水女子大学 教授)



「死者」という言葉そのものが矛盾を含んでいる。現代社会では人は死ぬとその法的、社会的存在は無になるとみなされ、あらゆる社会的・法的・政治的地位も権利も失う。医療の中でも移植医療では死亡が確認されるとその身体は生前の人格のすっかり消失した「もの」とみなす。しかし、死亡した人と何らかの係わりを持つ生き残った人々にとっては、死亡後も長い間死んだ人は「死者」として存在しているものと考えないではいけない何かの認識、思想あるいは信仰がある。日本は急速に近代化を果たし先進工業国ではあるが、その死生観には、伝統性を強く残し、その中心には「死者」の存在への確信がある。

略歴

1942年福岡県生まれ。九州大学教育学部卒業。テキサス大学大学院人類学研究科留学(1977年、Ph.D取得)。九州大学大学院博士課程単位取得満期退学。現在、お茶の水女子大学教授。専攻、文化人類学。関心の領域は広く、なかでも「ケガレ=不浄」説は、斯界の注目を集めた。近年は医療人類学の分野で活発な活動を行っている。

主な著書に『病気と治療の文化人類学』(海鳴社)『ケガレの構造』(青土社)『ケガレ』(東京堂)『脳死・臓器移植・がん告知』(ベネッセ)『医療人類学入門』『病と死の文化』『日本人の死のかたち』(共に朝日選書)『いのちの文化人類学』(新潮選書)、『暮らしの中の文化人類学』(出窓社)、編著に『文化人類学』(医学書院)などがある。

ミニレクチャー

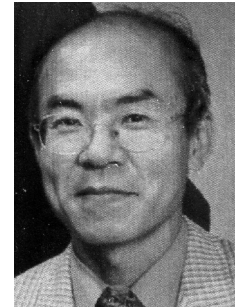
平成17年8月28日(日)

講演者 月江 富男

演題 外陰部皮膚疾患の外科的治療と再建術

講演者 田原 真也

演題 頭蓋・頭皮の再建



外陰部皮膚疾患の外科的治療と再建術

月江 富男（神戸市立中央市民病院 形成外科）

外陰部は、皮膚科医にとって、いわゆる「性病」が主たる対象疾患であった時代（皮膚泌尿器科）から、なじみの部位ではある、と思います。しかし、外陰部は、消化器官としての肛門、尿路としての外尿道口、生殖器としての膣・陰茎などが存在し、外科、泌尿器科、婦人科、などの専門的な配慮を要する「ニッチ」な領域です。従って、外陰部皮膚疾患において、外科的治療を行う場合は、関連各科との協力なくして、良好な結果を得ることは困難でしょう。

私は、形成外科医として、外陰部に限らず、各種再建手術において、他科との協同手術を行う機会が多かったです。その経験を踏まえまして、今回、外陰部手術について、考えてみたいと思います。

頭蓋・頭皮の再建

田原 真也（神戸大学 形成外科）



頭蓋骨や頭皮の欠損修復には確立された strategy がないのが現状である。頭蓋骨修復にはレジン板、ハイドロキシアパタイト、自家頭蓋骨外板、肋骨、ステンレスメッシュ、チタンメッシュ、など様々であり、軟部組織修復にも局所皮弁、筋皮弁、遊離皮弁など材料・方法が混沌としている。皮膚科、脳神経外科、耳鼻科等との共同手術の経験を通して、最近、われわれなりの修復法が定まりつつある。その方法論について報告したい。